

峴山の涙

——羊祜「墮淚碑」の繼承——

川 合 康 三

京都大學

一 羊祜「墮淚碑」の故事

西晉の羊祜（二二—二七八）が襄陽の峴山に登って感慨を催した故事は、『晉書』（六八四年成書）卷三四、羊祜傳が最も詳しく記している。

羊祜字叔子、泰山南城人也。……

祜樂山水、每風景、必造峴山、置酒言詠、終日不倦。

嘗慨然歎息、顧謂從事中郎鄒湛等曰、「自有宇宙、便有此山。由來賢達勝士、登此遠望、如我與卿者多矣。皆湮滅無聞、使人悲傷。如百歲後有知、魂魄猶應登此也」。

峴山の涙（川合）

湛曰、「公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、必與此山俱傳。至若湛輩、乃當如公言耳」。……

襄陽百姓於峴山祜平生游憩之所建碑立廟、歲時饗祭焉。望其碑者莫不流涕、杜預因名爲墮淚碑。荊州人爲祜諱名、屋室皆以門爲稱、改戶曹爲辭曹焉。……

羊祜は字叔子、泰山南城の人である。……

羊祜は山水が好きで、よい日和には必ず峴山に出かけ、酒を設けて吟詠し、終日飽きることがなかった。ある時深く嘆息して、從事中郎の鄒湛らに振り返って言った、「宇宙が生まれた時から、この山は存在している。以來、わたしや君たちと同じように、ここに登って遠くを眺めたすぐれた人士がたくさんいる。しかしみなこの世から消えて消息が知れない。胸が痛むことだ。もし死んだのちも精神がのこるならば、たましいとなってここに登ることだろう」。鄒湛が言った、「殿は四海に冠する徳、先哲を繼ぐ道を備えておられます。令名はこの山と同じように久遠に傳わることでしょう。わたくしなどのごとき

者は、殿のお言葉のとおりになるでしょう。……

襄陽の人々は岷山の羊祜がいつも行樂していた場所に碑と廟を立て、時節ごとに祀りをした。その碑を見る人は、誰もが涙を流したので、杜預が「墮淚碑」と名付けた。荊州の人々は羊祜の名前を避けて、居室は（戸と言わずに）門と稱し、「戸曹」は「辭曹」と言い換えた。……

都督荊州諸軍事として襄陽を治めていた羊祜は、岷山に登って人の命に限りあることに思いを致し、悲嘆したのである。これと似た結構をもった話が春秋・齊の景公（在位前五四七―前四九〇）にまつわるものとしてある。齊の景公も山に登り、人生の有限を悲しんでいる。『列子』『力命篇』から引けば、

齊景公遊於牛山、北臨其國城而流涕曰、「美哉國乎、鬱鬱芊芊。若何滴滴去此國而死乎。使古無死者、寡人將去斯而之何」。史孔・梁丘據皆從而泣曰、「臣賴君之賜、

疏食惡肉可得而食、駑馬稜車可得而乘也。且猶不欲死、而況吾君乎」。

齊の景公は牛山に遊び、北の方に國都を見下ろして涙を流しながら言った、「なんと美しい國だろう。木々が豊かに茂っている。どうしてほとりとこの國を去って死んでしまうのだろうか。昔から死というものがなければ、私はここを去ってどこへ行きはしないのに」。史孔と梁丘據の二人がもらい泣きして言った、「私どもは殿の賜與のおかげで、粗食惡肉ながら食べ物もあり、粗末な車馬ながら乗り物もあります。そんな暮らしですら死にたくないのですから、殿はなおさらでありしょう」。

この話は『晏子春秋』内篇卷一第十七、外篇卷七第二、同第四、また『韓詩外傳』卷十第十一章などに、多少の異同を含みながら繰り返し語られている。齊の景公と羊祜の故事に共通しているのは、いずれも土地の支配者が山に登ってその地を眺め下ろすこと、そこで生を惜しみ死の不可

避を悲しむこと、その二つがまず挙げられる。齊の景公が山へ登るのは、『列子』には「北のかた其の國城に臨む」、『晏子春秋』卷一には「北面して齊國を望睹す」、『韓詩外傳』には「北のかた齊を望む」と記されているように、自分統治する國を眺める行爲に結びついている。ここに日本でいう「國見」のような古代習俗の痕跡を見ることができさる。見る行爲によつてその地の支配を確認し、さらには豫祝する儀禮につながるのである。ちなみに「高きに登りて能く賦せば以て大夫と爲るべし」(『漢書』藝文志・詩賦略序)も、由來するところは國見に際して言祝ぎの言葉發する職能に關わるだろう。^①齊の景公の話がいつ生まれたものか、いつ記録されたものか、定めがたいにしても、ここで山に登っているのは、美的對象として風景に對する後の時代の態度とは異なる。齊の景公の言葉には「美しきかな國や、鬱鬱芊芊たり」という風土に對する贊美が見えるが、これも風景美を讀えたというよりも、國土を言祝ぐ呪言的な響きをのこしているかに思われる。

羊祜の場合はどうか。『晉書』の「山水を樂しむ」とい

峴山の淚(川合)

う記述は、いかにもそれが山水觀賞の行爲であつたかのように見えるが、しかしこうした書き方をしているのは『晉書』だけであり、峴山の記事を記す他の記録は「峴山に登る」といった、具體的行爲としてしか書いていない。以下、煩瑣にわたるが、類書・地誌のなかに見られるこの故事を原文のみ挙げれば、『晉書』と同じく唐初に編まれた『藝文類聚』(六二四年成書)には、卷三五・人部・泣に、

『襄陽耆舊記』曰、羊公與鄒閭甫登峴山、垂泣曰、「有宇宙便有此山。由來賢達、登此遠望者多矣。皆湮滅無聞、不可得知。念此令人悲傷」。

『北堂書鈔』(隋・大業年間六〇五—六一七成書)^②には、卷一〇二・藝文部・碑の「立碑峴山」の條に、

『襄陽記』云、羊公好上□□、參佐爲立碑峴山。

とあり、同じく「參佐立碑」の條に、

『荊州圖記』云、羊叔子與鄒潤甫嘗登峴山遠望、後參佐爲立碑著故處、百姓每行望碑、莫不悲感、因名爲墮淚碑。

と見える。『襄陽耆舊記』は『隋書』經籍志・史部・雜傳に「五卷、習鑿齒撰」と著録されている。習鑿齒は『晉書』卷八二の本傳によれば、襄陽の人、生卒年は確定できないが、桓溫に仕えたことから、東晉、四世紀中頃の人であらうと推測される。これが現在確認できる羊祜峴山の故事の記録として早いものといえよう。ちなみにそこでは従者を「鄒閭甫」に作るが、他の資料ではすべて「鄒潤甫」と表記される。鄒潤甫については宋・洪邁『容齋題跋』（津逮秘書）二三集所收）卷一、「跋晉代名臣文集」の條に、「鄒湛姓名、因羊叔子而傳、而字曰潤甫（鄒湛の姓名は、羊叔子のおかげで後世に傳えられ、字は潤甫という）」というが、しかし『晉書』卷九二文苑傳に傳も立てられている人物ではある。「鄒湛、字は潤甫、……深く羊祜の器重する所と爲る。……著わす所の詩及び論事議二十五首、時の重ずる

所と爲る」、官も侍中、少府に至っているし、『隋書』經籍志にはその著として『周易統略』五卷、また梁の時の存目として『鄒湛集』三卷、錄一卷が著録されているから、決して無名の従者ではない。

羊祜の故事は唐以後の地誌にも記録されていく。『元和郡縣圖志』卷二一、「山南道・襄州・襄陽縣」に言う、

峴山、在縣東南九里。山東臨漢水、古今大路。羊祜鎮襄陽、與鄒潤甫共登此山、後人立碑、謂之墮淚碑、其銘文卽蜀人李安所製。

そこにいる李安は、嚴可均『全晉文』卷七〇では、李興、字は雋石、の別名として、碑文を「晉故使持節侍中太傅鉅平成侯羊公碑」と題して録し、「明宏治四年重立碑拓本、又見湖北通志」と出處を記している。李興とすれば、『晉書』卷八八、孝友傳の李密的傳に附される李密の次子李興のことで、そこには、

興之在（鎮南將軍劉）弘府、弘立諸葛孔明・羊叔子碣、使興俱爲之文、甚有辭理。

李興が鎮南將軍劉弘の役所にいた時、劉弘は諸葛亮と羊祜の碣を立てたが、その文はいずれも李興に起草させ、それはすじの通った文章であつた。

と、羊祜の碑文を書いたことが記されている。李密の生卒年（二二四—二八七）^③から推せば、子の李興は三世紀後半の人であり、羊祜とはほぼ重なることになる。明・楊慎『譚苑醍醐』（函海所收）卷八には、『全晉文』が録するの多少の字の異同を含む「晉故使持節侍中太傅鉅平成侯羊公之碑」を載せているが、その末尾には「此碑元無撰人姓名。按益州記云、犍爲李賜撰。賜、密之子也（この碑にはもともとと撰者の名がない。益州記を見ると、犍爲の李賜の撰という。李賜は、李密の子である）」と記す。李密の長子である李賜、字宗石、の傳も李密傳に附されている。『隋書』經籍志・集部・總集類に梁の存目として『羊祜墮淚碑一卷』が著録

峴山の淚（川倉）

されているが、撰者の名はない。それは複数の墮淚碑の碑文を収めていたものであろうか。隋志のその部分には碑文集が並べられているが、一つの碑についての碑文を集めた書は少なく、羊祜墮淚碑がかなりの關心を集めていたことが知られよう。

さらに、『太平御覽』卷四三、「地部、峴山」が引く『十道志』には、

十道志曰、羊祜常與從事鄒潤甫共登峴山、垂泣曰、「自有宇宙、便有此山。由來賢達勝士、登此遠望、如我與卿者多矣。皆湮滅無聞、不可得知。念此使人悲傷。我百年、魂魄猶當此山也」。潤甫對曰、「公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望、當與此山俱傳。若湛輩、乃當如公語耳」。後以州人思慕、遂立羊公廟、并碑於此山。

『太平寰宇記』卷一四五、襄州には、

墮淚碑在縣東九里。晉羊祜之鎮襄陽、有功德于人。及

卒、百姓于峴山祐平生遊憩之所建碑立廟、歲時饗祭。望其碑、莫不流涕。杜預因名墮淚碑。

このように墮淚碑の故事は脈々と記述されていくが、『晉書』に付け加えるべき事柄はほとんどないといつてよい。そしてまた「樂山水」という書き方をしているのは『晉書』以外にないのである。『晉書』では羊祐のほかにも阮籍について、「或登臨山水、經日忘歸（或いは山水に登臨し、日を経るも歸るを忘る）」（『晉書』卷四九、阮籍傳）と記している。これは『三國志』卷二一の阮籍傳にはないもので、『太平御覽』卷六一一、「勤學」に收められる『七賢傳』に、「（阮籍）或遊行丘林、經日不返（或いは丘林に遊行し、日を経るも返らず）」とあるのが、これに近い。『七賢傳』は『隋書』經籍志では「孟氏撰」、撰者の姓を記すのみだが、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志には「孟仲暉撰」と言い、『隋書經籍志詳攷』では「洛陽伽藍記」卷四に見える孟仲暉であろうとする。ならば六世紀の人でずいぶん遅れることになる。『七賢傳』の「遊行丘林」、『晉書』

の「登臨山水」、両者が指している事柄は同じでも、意味には隔たりがある。「遊行丘林」は山野跋涉の實際の行動をあらわすとともに、それが宗教的ないし哲學的な模索の隱喩になっているかに見えるが、「登臨山水」は美的對象として自然に向かい合う態度をあらわしている。阮籍について「登臨山水」と記す『晉書』は、山水を觀賞する美意識が定着してからの記述ではないだろうか。そして『晉書』羊祐傳の「樂山水」の記述も、この事柄を記す類書や地誌がすべて「登峴山」といった具體的な行爲として記し、「樂山水」と言うのが『晉書』だけであるのを見れば、これもまた後の時代の觀念から逆に照射して羊祐の登山に意味付けしたものだといえないだろうか。或いは「峴山に登る」、「山水を樂しむ」というように表現が搖れていること自體が、羊祐の登山の過渡的な性格をあらわしていると言ふべきか。すなわち羊祐の場合は、支配する領土を見下ろす古代の呪術的な習俗と、六朝期に浸透していく山水の美的享受、古代から中世へと變化していくその中間に位置しているのである。

山に登った土地の支配者がそこで死を思つて悲しみを生じるところは共通するものの、悲哀の理由にはいくらか相違がある。齊の景公は美しい領土を捨てて自分が死んでしまふこと、自分が永遠に所有できないことを思つて悲しむ。羊祜も今の自分の樂しみが永續できないことが悲哀の發端になっているのだが、久遠に存在し續ける山と有限の人の命を對比して、過去の人士の消滅を想起し、そこから現在の自分も未來には過去の人としてこの世から消えていくこと、死が人間に普遍的な必然であることに思いを致している。すなわち齊の景公が自分自身の生の喪失を悲しんでいるのに對して、羊祜の場合は人間全體の宿命のなかに自分の死を置いて悲哀を生じている。

齊の景公と羊祜の故事には、なお共通する要素がある。いずれの場合も、主君が悲しむのに對して侍従の者が慰めるのである。齊の景公の場合は、「史孔・梁丘據」〔列子〕、「艾孔・梁丘據」〔晏子春秋〕内篇、「左右の哀しみを佐けて泣く者三人」〔同・外篇〕、「國子高子」〔韓詩外傳〕、侍従の名前に異同はあるが、みな悲しむ景公を慰撫

している。羊祜の方では鄒湛がその役割を擔つている。もつとも、慰め方は同じでない。齊の景公の家臣たちは、衣食住行のうちの食と行を擧げて、自分たちは粗末な暮らしをしていても生に執着するのであるから、すべてに充たされた殿はなおさらのことでしようと、景公の悲しみへの共感を語る。臣下のこの言葉は期せずして景公の悲哀が何に由來するかを明らかにしている。つまり君主として享受している物質生活、充足している現世の欲望、それを放棄せざるをえないことが景公にとつての死なのだ。そしてまた家臣たちは自分たちと景公を比較して、喪失の度合いがより強い景公はより大きな悲しみを抱くことだろうというかたちで共感を示し、共感することによつて景公を慰めている。一方、羊祜の家臣の鄒湛は、徳の高さがもたらす名聲を持ち出す。身は滅んでも名は永遠にのこる、名によつて人は生の有限を超越できるという思考がここには見られる。名聲の永續が肉體の死を超越することを持ち出して悲哀を輕減しようとしている。景公が現世の欲望や快樂の放棄を悲しんだのに比べて、羊祜の生の哀惜は具體的でない。そ

こには生そのものの消失という、人間に普遍的な死の恐れが語られているように見える。

二つの故事は同じ結構をもつてはいても、それが語ろうとしている意味は大きく隔たつてゐる。齊の景公の話は、それを記している話は例外なく、景公の悲しみを晏子が笑ひ飛ばすという展開のなかに置かれてゐるのだ。眼下の領土を捨てて死んでいかねばならないことを悲觀する景公に對して、晏子は古來もし死というものがないとすれば、景公が今ここにゐることもできない、人間にとつて死は必然であり、死あればこそ人は次々生まれてくるのだと説き、景公がそれに承伏して話は結ばれる。齊の景公の故事ではこのように死の悲しみが解決される話として語られてゐるに對して、羊祜の場合は論理による解決ではなく、死の必然がもたらす悲觀の情感が餘韻をのこすのである。そしてここに漂つてゐる人生短促を悲しむ情感は、後述するよううに六朝期に廣まつていく抒情のかたちに繋がつてゐる。

齊の景公の故事にはバリエーションが多いが、そのなか

には景公の悲嘆が酒席で發せられたことを記してゐるものがある。『晏子春秋』外篇卷七に「景公 酒を泰山の上に置く。酒酣にして、公 其の地を四望し、惘然として嘆き、涙數行にして下る」。同じ卷には登高の要素はないが、宴席で死に言及する話も見える。「景公 酒を飲みて樂しむ。公曰く、古よりして死無くんば、其の樂しみ若何、と。晏子對えて曰く、古よりして死（無くんば）、則ち古の樂しみなり。君何ぞ得んや。……」。羊祜の場合は明らかに岷山に登り、「置酒言詠」しての感慨である。このように歡樂のさなかにあつて生を惜しんで悲哀を生じるといふかたちにも類型がある。漢武帝「秋風辭并序」（『文選』卷四五）に言う、

上行幸河東、祠后土。顧視帝京、欣然。中流與群臣飲燕。上歡甚、乃自作秋風辭曰、

秋風起兮白雲飛、草木黃落兮鴈南歸。蘭有秀兮菊有芳、攜佳人兮不能忘。泛樓舫兮濟汾河、橫中流兮揚素波、簫鼓鳴兮發棹歌、歡樂極兮哀情多、少壯幾時兮奈老何。

上は河東に行幸し、大地の神を祭った。帝都を振り返って、満足げであった。河のなかで臣下たちと酒盛りを催した。上はいたくご機嫌で、自ら秋風の辭を作り、それには言う、

秋の風が立ち白い雲が飛ぶ。草も木も枯れて鴈は南に向けて歸る。蘭は花咲き菊は香る。佳人を忘れがたく携えてきた。やぐら船を浮かべ汾河を渡る。白波をあげながら河のただなかを横切る。笛太鼓が鳴り、舟歌が起くる。喜びが行き着くところに悲しみが生まれる。若い時はどれほどあることか、迫りくる老いはいかんともしがたい。

これは『漢書』には見えず、『漢武帝故事』と『文選』に載せられているものだから、漢武帝の「自作」という信憑性は乏しいが、「歡樂」の絶頂にあつて「哀情」を發していること、その「哀情」は老いを必然とする人間に普通の悲しみであること、羊祜の涙に共通するといえよう。

作者の確かなところでは、魏文帝曹丕（一八七—二三六）

岷山の涙（川合）

にも歡樂の中にあつてその樂しみがつかの間のものであることを悲しむ述懷がある。「與朝歌令吳質書」（『文選』卷四二二）に言う、

……清風夜起、悲筋微吟。樂往哀來、愴然傷懷。余顧而言、斯樂難常。足下之徒、咸以爲然。今果分別、各在一方。……

……清らかな風が夜になって生じ、筋がほのかに音を立てていた。楽しい時間が去つて悲しみが到來し、戚戚として胸を痛めた。私はみなの方を向いて言つた、「この幸福はいつまでも續くものではない」と。君たちも、みな同意した。今、果たして別離して、それぞれちりぢりになっている。……

建安の文人たちとの幸福な交遊、そのさなかにあつて曹丕はそれが永續しないことを豫測し、果たしてその時の豫測どおり、仲間たちは或いは死に或いは離ればなれになつ

た後に回想した言辭である。歡樂の絶頂にあつてその喪失を豫測し悲痛するという點では漢武帝「秋風辭」に通じることが、「秋風辭」は饗宴の最中という今現在の時點から、それが終結に向かうことを感取し、それを擴げて人生も少壯から老へと移行していく時間の流れを嗟嘆するのに對して、曹丕の場合は歡樂の最中であつてその喜びが永續しないことを豫感したことを、ともに楽しんだ文人たちがすでに物故し離散したあとになつた時點から振り返つて述べている。すなわち、過去において未來を豫感したことを、その未來が現在になつた今の時點からふりかえるという錯綜した時間構成が、述懷をより複雑で感慨深いものにしていく。

羊祜よりほゞ一世代後の西晉・石崇（二四九—三〇〇）が元康六年（二九六）、金谷園で盛大な酒宴を催したことは石崇の「金谷詩序」（『藝文類聚』卷九など）、「全晉文」卷三三三）に語られている。それがいかに豪華な宴であつたかを記したのに續けて言う、

感性命之不永、懼凋落之無期、故具列時人官號姓名年紀、又寫詩箸後。後之好事者、其覽之哉。……

生命が永久に續かないことを思い、いつこの世を去るかも知れぬことを恐れ、そこでこの時の人の官名・姓名・年齢をつぶさに記録し、また後ろに詩をつけておく。後世に興味をもつ人が、これを見るかも知れない。……

石崇の盛宴もその最中において、それがほどなく果てることを、そしてそこに與つた人々もまたこの世から消えていくことを豫感し、悲しみを抱いている。

宴の最中であつて悲嘆を發する典型的な例は、王羲之「蘭亭詩序」に見られる。『晉書』卷八〇、王羲之傳に引かれたそれは、宴の樂しさを列舉したあと、突如として悲嘆に轉じる。

夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其

欣於所遇、暫得於己、快然自足、不知老之將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、已爲陳跡、猶不能不以之興懷。況修短隨化、終期於盡。古人云、死生亦大矣、豈不痛哉。……

いつたい人がみな一生を送るにあたって、胸中の感懷を一室のなかでひそやかにかたることもあれば、志のおもむくまま自由奔放にふるまうこともある。このように人間の生きかたは實に靜動さまざまであるが、しかしだれしも境遇のよろこばしく得意なときには、しばしそこに満ちたりて、老境がわが身をおとずれようとしていることにさえ氣がつかないでいる。やがて得意が倦怠にかわり、感情がうつろいゆくと、それにつれてやるせない感慨がこみあげてくる。ついまいしがたまでよろこびであったものが、つかのまにもはや過去のものとなつてしまつて、ただこれしきのことにすら人間の心は動かされずにはおれないのである。ましてや人間の生命は長い短いのがいいこそあれ、けつきよくは盡きることを約束さ

峴山の涙（川倉）

れている。古人は、「死生もまた大なり——死生こそ一大問題だ」といつているが、いたましいかぎりではないか」……^⑤

このように見てくると、宴の歡樂の最中であつてそれが果てることを豫知し、さらにそこから人生そのものが時間のなかの一齣に過ぎないという認識に擴げて悲哀を生じるというかたちは、六朝期の全體にわたつて流れている一つのモチーフであつたことがわかる。そして羊祜が峴山に登つて生じた悲しみも、そうしたモチーフの一つの早い時期におけるあらわれだったのである。

歡樂の最中で悲哀を發する契機となるものが、「蘭亭詩序」には明示されていないために、唐突に悲嘆に轉ずるかに思われるが、その宴を「信に樂しむべきなり」と述べる、一つ前の段落のなかに、悲嘆に繋がる伏線は潜んでいる。それは「仰ぎて宇宙の大なるを觀、俯して品類の盛んなるを察す」の「宇宙」の語にある。羊祜の言葉にも、「宇宙有りてより、便ち此の山有り」、今、自分が登つて

いる峴山を宇宙開闢以來の時間の流れのなかに位置づけ、そこから「由來賢達勝士、此れに登りて遠望すること、我れと卿の如き者多し」と、悲しみを生じるに至る心理の過程が明らかに記されている。王羲之の「宇宙」は空間を指すものであるけれども、いずれも時空の大きな全體のなかに今の自分を置いてみることによって悲哀に繋がっていくのである。

羊祜峴山の記事には、宴の中に悲嘆を生じる類型には見られない要素がさらにある。一つは、悲しむ羊祜を慰める鄒湛の存在である。鄒湛の慰めの言葉には、人の命は有限であつても名聲をのこすことによつて永遠たりうるといふ、もう一つの觀念が認められる。そして鄒湛のこの言葉は決しておごなりの慰めではなく、上司に對する卑屈なへつらいでもなく、鄒湛の羊祜に對する敬愛の情が眞にこもっているかに感じられるために、この話柄は人の悲しみを語るものであつても、そのなかに人間の暖かみを含んだ、氣持のいいものになっている。主従の間にふだんからあつたであらう信頼と敬愛を傳えているのである。それがこの話

が語り續けられた一つの理由であらう。

羊祜に對して愛情を覺えていたのは、鄒湛だけではなく、恩愛の情豊かな治世者であつたとされる羊祜を慕う「襄陽百姓」にとつても、羊祜は慕われるべき對象だったのである。その碑を望んで人々が涙したのは、直接には優れた爲政者を失つた悲しみによるであらうが、その碑が峴山の「平生遊憩之所」に建てられたことは、峴山を楽しむ自分も過去の人物と同じようにこの世を去るであらうことを豫測した羊祜の悲しみを、羊祜が死んだあとに共有して悲しむという心情も含まれていたことであらう。とすれば、曹丕が一人の内部において體驗した、過去における未來を現在から振りかえるという時間構造を、主體を換えてあらわしていることになる。また、石崇や王羲之が自分たちの湮滅を豫想したにとどまるのを、第三者を設けることによつて確認しているともいえよう。

このように羊祜「墮淚碑」の故事は、歡樂のなかで生じる悲哀という六朝に通底する型を備えつつ、さらに君臣間の暖かな情愛を帯びることによつて、心地よい感傷でくる

みながら、伝えられていく。

二 唐代の繼承

羊祜墮淚碑故事の骨格となっていた、自然の悠久と人のはかなさとの對比、命の不定ふじようから發する悲哀の情感、それは初唐の抒情詩のなかで繰り廣げられることになる。劉希夷（六五一—？）の「代悲白頭翁」、張若虛（？—？）の「春江花月夜」、いずれも七言のたおやかな流れに身をゆだねるようにして、人の生の短促を感傷をこめて唱う。そこにあふれているのは、悲しみを甘美な色に染めて柔らかに歌い上げる情感である。

初唐歌行詩の感傷的な情感をぬぐい去って、同じテーマを形而上的な様相のもとに再構成しているのが、陳子昂（六六一—七〇二）の「登幽州臺歌」である。ここでは時空の廣大な廣がりの中にぼつんと置かれた人間の孤獨というもの、ものが抽象的なまでに研ぎすまされて形象化されている。いまさら掲げるまでもない名高い作であるが、ただそれには偽作とする説もある。

峴山の涙（川合）

峴山と羊祜は、陳子昂の作であることが確かな詩のなかに詠じられている。「峴山懷古」（『全唐詩』卷八四）に言う、

秣馬臨荒甸	馬を	秣 まぐさか いて荒甸に臨み
登高覽舊都	高きに登りて舊都を覽る	
猶悲墮淚碣	猶お墮淚碣を悲しむ	
尙想臥龍圖	尙お臥龍圖を想う	
城邑遙分楚	城邑 遙かに楚を分かち	
山川半入吳	山川 半ば吳に入る	
丘陵徒自出	丘陵 徒自 いたずら に出で	
賢聖幾凋枯	賢聖 幾 いんずら ど凋枯す	
野樹蒼煙斷	野樹 蒼煙斷え	
津樓晚氣孤	津樓 晚氣に孤なり	
誰知萬里客	誰か知らん 萬里の客の	
懷古正躊躇	古を懷いて正に躊躇するを	

襄陽にまつわる古人、羊祜と諸葛亮を偲び、彼らがこの世を去ったことを悼んでいるのではあるけれども、しかし

詩全體の重心は人の代謝を悲しむことではなく、羊祜や諸葛亮と同じように功業を立てたいという作者の願望を表出することにある。それは羊祜と諸葛亮の二人を並べたことによつて共通する意味が明らかになるためであり、また末二句が二人を思慕し敬愛する作者の心情に歸着するところにもあらわれている。陳子昂が「墮淚碑」の事をを用いながらも、人生短促の感傷に沈潜する方向には向かわず、己れの意志とそれが實現できない煩悶を唱っているところは、初唐詩における陳子昂の役割をよくあらわしている。

張九齡（六七八—七四〇）の「登襄陽峴山」〔『全唐詩』卷四九〕にも、諸葛亮と羊祜が對になつて登場しているが、全體の情感は陳子昂とは異なる。

昔年亟攀踐 昔年 亟^{しば}ば攀踐し
征馬復來過 征馬 復た來たり過ざる
信若山川舊 信に山川の舊の若し
誰如歲月何 誰か歲月を如何せん
蜀相吟安在 蜀相 吟 安こにか在る

羊公碣已磨 羊公 碣 已に磨す
令圖猶寂寞 令圖 猶お寂寞
嘉會亦蹉跎 嘉會 亦た蹉跎
宛宛樊城岸 宛宛たり 樊城の岸
悠悠漢水波 悠悠たり 漢水の波
逶迤春日遠 逶迤として 春日遠く
感寄客情多 感寄せて 客情多し
地本原林秀 地は本と原林秀で
朝來煙景和 朝來 煙景和す
同心不同賞 同心 賞を同じくせず
留歎此巖阿 留歎す 此の巖阿

ここでは往時を悼む悲しみの感情が支配的になっているように見える。感傷にとどまり、人の生についての思辯にまでは至っていないのである。

孟浩然（六八九—七四〇）は生涯のほとんどを襄陽の地で送ったために、峴山や羊祜をたびたび詩のなかに用いているが、羊祜の故事を正面から取り上げ、そのテーマを直接

扱っているのは、「與諸子登峴山」詩である（『孟浩然詩集』
卷上^⑦）。

人事有代謝 人事には代謝有り

往來成古今 往來して古今を成す

江山留勝迹 江山 勝迹を留め

我輩復登臨 我れらが輩 復た登臨す

水落魚梁淺 水落ちて魚梁淺く

天寒夢澤深 天寒くして夢澤深し

羊公碑字在 羊公 碑字在り

讀罷淚霑襟 讀み罷りて涙 襟を霑す

冒頭の二句は、人が次々生まれては死に、それを繰り返すことによつて歴史が作られていくという一般論から始まる。そこに羊祜の故事に見える人間の生死に關する觀念が明らかに懷抱されているが、しかし人間の歴史全體を視野に收める大きな視點から述べているために、悲哀の感情はあらわでない。三・四句は永遠の自然とそれに對する人間

峴山の涙（川合）

が對比される。そこに臨む自分たちは永續する「勝跡」にひとたび觸れる人間の一部分であり、直接表されてはいないものの、すでに悲哀を帯びている。その悲哀は五・六句で風景に反映され、そして七・八句に「淚霑襟」という慣用表現で露呈されて詩が終わる。人生短促の悲哀をテーマとする詩には違いないのだが、しかしより重要なのは悲しみを唱うことよりも、羊祜の言辭のなかに示されていた過去——現在、現在——未來というかたちで自分を人間の歴史のなかに位置づける視點をそのまま共有していることの意味である。羊祜が過去の峴山登山者の不在から現在の登山者である自分も未來においては不在者となるであろうと悲痛したように、孟浩然是「我れらが輩」も「復」た羊祜と同じようにに峴山に登り、羊祜が豫見したように羊祜の不在を確認する一方、自分たちの未來における不在を豫見し、そうした人間の定めを思つて涙するのである。羊祜の悲哀を孟浩然も共有する。先人の感慨を共有することによつて孟浩然是連綿と續いてきた人の流れのなかに自分自身をも組み込む。歴史のなかに己れを組み入れることによつて傳統に連

なることを確認するのである。そして自分にとどまらず、人はこれからのちも自分と同じように、過去—現在—未來が順繰りに繰り返されていくであろうという認識。人の生の反復を認識することによって、死んでは生まれ、生まれでは死んでいく人間の一部分であるという人間全體の運命への歸屬感を抱く。悲哀を抱きつつも、人の連なりへの歸屬を確認することによって、感傷に流されない、或る種の達觀に近づいた思辯の詩となっているところが、この詩が愛好されたゆえんであろう。

孟浩然是「盧明府九日峴山宴袁使君・張郎中・崔員外」詩（同上卷下）にも、峴山のテーマを取り上げている。その冒頭「宇宙 誰か開闢す、江山 此に鬱盤す」の二句からすでに羊祜の述懐が響いている。詩には自然の永遠性のなかでつかの間の行樂をする人の營みという同じ感慨が底流しているが、社交的な性格の詩ゆえにテーマは「與諸子登峴山」詩ほどあらわに述べられていない。

峴山羊祜の故事は、唐代の詩のなかに常用の典故として頻見する。しかしその主題を一篇の詩全體で扱ったものは、

孟浩然の「與諸子登峴山」詩に代表されるだろう。そして杜甫、また中唐の名だたる詩人には、峴山の嘆きを正面から唱う詩篇は見られない。それは詩の主題がしだいに變化していく過程を示すものであろうか。

三 宋代の展開

宋代に入っても、羊祜に對する追慕の情は續く。梅堯臣の「送王龍圖源叔之襄陽」詩（『梅堯臣集編年校注』卷一七。慶曆七年一〇四七）^⑧では、襄陽に赴任する王洙（字源叔）に對して、「行當至峴山、羊公存廟像。簫鼓有時奠、道德其可仰」と、羊祜のような治を行うように勵ますが、その詩に見送られて襄陽に赴任した王洙が、廢れていた羊祜の廟堂を修復し、祀りを再開したことは、范仲淹「寄題峴山羊公祠堂」詩（『全宋詩』卷二六五）^⑨に述べられている。

襄陽以外の地に、羊祜を記念する臺が築かれたこともあった。裴材は嘉祐年間（一〇五六—一〇六三）、臨川に着任するとその翌年、臨川の町の東南隅に「擬峴臺」を築いた。そのことは王安石の「爲裴使君賦擬峴臺」詩に見える

〔王荆文公詩李壁注〕卷三五^⑩。羊祜に對するこのような尊

崇の念は、何よりも羊祜が治世者として徳高い功績をのこしたからであり、田錫は「羊祜杜預優劣論」〔咸平集〕卷一二を著して、徳に勝る羊祜に軍配をあげている。

峴山墮涙の故事は、詩のなかで唐代と同じように繰り返し用いられているものの、宋代では優れた爲政者としての羊祜に注目する方向に傾いていく。

そしてその羊祜の故事に對して、從來には見られなかった態度が出現するのも宋代である。それは歐陽脩「峴山亭記」に見られる。

峴山臨漢上、望之隱然、蓋諸山之小者。而其名特著於荊州者、豈非以其人哉。其人謂誰。羊祜叔子、杜預元凱是已。方晉與吳以兵爭、常倚荊州以爲重、而二子相繼於此、遂以平吳而成晉業、其功烈已蓋於當世矣。至於風流餘韻、藹然被於江漢之間者、至今人猶思之、而於思叔子也尤深。蓋元凱以其功、而叔子以其仁、二子所爲雖不同、然皆足以垂於不朽。余頗疑其反自汲汲於後世之名者、何

哉。

傳言叔子嘗登茲山、慨然語其屬、以謂此山常在、而前世之士皆已湮滅於無聞、因自顧而悲傷、然獨不知茲山待己而名著也。元凱銘功於二石、一置茲山之上、一投漢水之淵。是知陵谷有變而不知石有時而磨滅也。豈皆自喜其名之甚而過爲無窮之慮歟。將自待者厚而所思者遠歟。

山故有亭、世傳以爲叔子之所遊止也。故其屢廢而復興者、由後世慕其名而思其人者多也。熙寧元年、余友人史君中輝以光祿卿來守襄陽。明年、因亭之舊、廣而新之。既周以回廊之壯、又大其後軒、使與亭相稱。君知名當世、所至有聲、襄人安其政而樂從其遊也。因以君之官、名其後軒爲光祿堂。又欲紀其事于石、以與叔子・元凱之名並傳于久遠。君皆不能止也。乃來以記屬於余。

余謂君知慕叔子之風、而襲其遺迹、則其爲人與其志之所存者、可知矣。襄人愛君而安樂之如此、則君之爲政於襄者、又可知矣。此襄人之所欲書也。若其左右山川之勝勢、與夫草木雲烟之杳靄、出沒於空曠有無之間、而可以備詩人之登高、寫離騷之極目者、宜其覽者自得之。至於

亭屢廢興、或自有記、或不必究其詳者、皆不復道。

熙寧三年十月二十有二日、六一居士歐陽脩記。

〔居士集〕卷四〇

峴山は漢水を見下ろす位置にあり、遠くから眺めるとはつきりしない。山々のなかでも小さなものである。それなのに荊州のなかでとりわけ名高いのは、それにまつわる人のためではないか。その人は誰かといえ、羊祜、字は叔子、そして杜預、字は元凱にほかならない。

晉が吳といくさをしていた時、常に荊州を重要な據點としたが、二人は相次いでこの地にあり、ついに吳を平らげて晉を建てる大業を成し遂げた。その功績は當時の人々を壓倒するものであった。彼らの遺風は、江漢の地一帯にゆつたりと廣がり、今に至るまで人々の心にのこっているが、羊祜に對する思慕はとりわけ深い。それは杜預は功業で、羊祜は仁で知られるからである。二人のしたことは同じでないが、どちらの遺業も不朽というに足るものである。しかし私はそうした事跡がありながら、

彼らが後世に名を遺そうとあくせくしていたのはなぜか、不思議でならない。伝えられた話によると、羊祜はこの山に登って、深く嘆息して屬僚に「この山はずっと存在しているのに、過去の人たちはみな滅びてしまった」と語り、そして自分を顧みて悲しんだという。この山は自分のおかげで名が高くなったことを知らないのである。

杜預は二つの石に自分の功績を刻み、一つはこの山の上に置き、一つは漢水の水底に沈めた。山と谷が變化することを豫知してのことだが、石でもいつかは摩滅すること知らないのである。いずれも自分の名前にこだわらず、永遠に遺そうという過度な配慮をしたものである。或いは自分に期するところが大きすぎて遙か遠くまで思慮したのであろうか。

山にはもともと亭があり、羊祜が遊んだところと伝えられている。何度も朽ちては復興されたのは、後世にその名を慕いその人を思う者が多かったからである。熙寧元年、私の友人の史中輝君が光祿卿の肩書きをもって襄陽の太守となった。翌年、亭の元の規模の通りに新たに

擴張し、壯大な回廊をめぐらせ、後ろの建物も大きくして亭と釣り合うようにした。君は世に著名であり、至るところに聲望がある。襄陽の人はその治世に満足し、喜んで一緒に行樂した。君の肩書きによって、後ろの建物を光祿堂と名付けた。さらにその事績を石に記して、羊祜や杜預の名とともに永遠に伝えようとした。それをすべて君は止めさせることができず、私に文を綴るように頼んできた。

私は君が羊祜の人品を慕って、その遺跡を踏襲しているのだと思う。ならば、君の人格と志向は、理解できよう。襄陽の人が君を愛してこのように平安でいられるのだから、君の襄陽における治世は、理解できるだろう。それが襄陽の人たちが書き付けたことだ。まわりの山水の優れた景勝、霧をかぶった草木や雲が廣大な空間のなかで見え隠れするさま、詩人が登高し遠くを眺めて「離騷」を書けそうな様子は、この景を見る人が自分で體得できよう。亭が何度も興廢したことは、それについての記録があり、詳しく語るまでもないから、いっさい

峴山の涙（川合）

ここには記さない。

熙寧三年十月二十有二日、六一居士歐陽脩記す。

熙寧三年（一〇七〇）といえば、歐陽脩は六十四歳の年の七月、最後の官となった知蔡州に任じられ、九月二十七日に蔡州に着任している^⑩。

史中輝については、熙寧元年、襄陽の知として赴任したことがここに記されている以外に事跡は明らかでない。史中輝が峴山亭を改修し、さらに光祿堂なるものを増築し、羊祜・杜預に倣って自分の功績を記した石碑を建てようとしたのに際して、文を依頼された歐陽脩の趣旨は明らかで、名を後世に遺そうとして汲々とすることよりも、後世に名を遺すに足る實績をあげることにこそ努めるべきだというのが、そうした全體の趣意の要求があるとはいえ、羊祜・杜預に對する態度がそれまで續いてきた禮贊から逆轉していることに着目せざるをえない。二人の功績を否定するものではないが、しかし功績をあげればそれで十分であるはずなのに、さらに名を遺そうとした二人の心情が理解

できないと歐陽脩はいう。羊祐・杜預を並べて語っているために、歐陽脩の行文にはいくらか論理に曖昧な部分を含んでいる。杜預に對する意見は明快で、自然の變化をも顧慮して山の上と水の底に二つの碑を用意したのは、石自體が摩滅することを知らない愚かな配慮だったというのである。それに比べて羊祐に對する批判はわかりにくい。峴山は實際には無名の小さな山に過ぎず、羊祐の名聲によつてその名がのこつたにすぎないというのに、羊祐が山の永續に對して自分の湮滅を嘆いたのがおかしいというのだろうか、名をのこすのに汲々とした人物として杜預と一括されている。直接の批判の對象は今、同じことを繰り返そうとしている史中輝に向けられているのであり、まず功業をあげるることこそ肝要だと歐陽脩はいいたいのである。そうした文脈のなかにおかれたものであるとはいへ、それまでに共感され續けてきた羊祐の悲嘆に對して、ここでは一瞥もくれない。人生の短促を過去の人とともに悲しむという抒情の枠組みが崩されているのである。そもそも中國古典文學は文學的因襲が感情や思考の型を用意し、それが時

間軸のなかで共有されるところに、文學が營まれてきたものであった。六朝から唐代へと踏襲されてきたそうした類型が、歐陽脩によつて壞されていることは、文學の全體がここで大きく變質することをあらわしている。これも唐と宋の斷絶、中世から近世への變貌の一つのあらわれではないだろうか。

歐陽脩の羊祐に對する見方には、「峴山亭記」での主張を貫くために、敢えて斜に構えたような態度を伴っていないでもない。しかし歐陽脩の門下に當たる蘇軾に至ると、人生短促の傳統的な悲觀の情は完全に拂拭されている。

「赤壁賦」のなかの「客」が月夜の赤壁から曹操を想起し、「一世之雄」たる曹操すら湮滅したことを思つて、「吾が生の須臾なるを哀しみ、長江の窮まり無きを羨む」と嘆くのは、峴山の上で涙した羊祐と同質の悲觀の情に満ちている。それに對して「蘇子」は悲觀を樂觀に轉じる新たな哲學を開陳していくのである。¹²⁾ 歐陽脩が悲觀の共有を否定したのを受けて、蘇軾はさらにそれを積極的に主張していくのだ。

歐陽脩・蘇軾の登場によって、羊祜の悲嘆がとぎれるというわけではない。人生短促の悲哀、その悲哀にともなう甘美な感傷、それはそれで一つの抒情として文學のなかに繼承されていく。しかしそれとは異質の、悲觀の情感を乗り越える新たな抒情がこのように生まれていくことを、羊祜墮淚碑の展開を通して見るができる。

註

① 「登高」のもつ呪術的な意味については、先行研究の紹介も含めて、宇野直人「登高詩の變遷 その一」(『中國古典詩歌の手法と言語——柳永を中心として——』研文出版、一九九一、所收)に詳細に説かれている。

② 『四庫全書總目提要』子部類書類『北堂書鈔』に「此書蓋世南在隋爲祕書郎時所作」。『舊唐書』卷七二、虞世南傳に「大業初、累授祕書郎、遷起居舍人」、『新唐書』卷一〇二、虞世南傳に「大業中、累至祕書郎」。

③ 吳海林・李延沛『中國歷史人物生卒年表』(黑龍江人民出版社、一九八一)による。

④ 興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(汲古書院、一九九五。范祥雍『洛陽伽藍記校注』(上海古籍出版社、一九七八新版)の注にも、『新唐書』五八藝文志有孟仲暉「七賢傳」七卷、與此孟仲暉殆是一人」という。

峴山の涙(川合)

⑤ 譯は吉川忠夫『王羲之——六朝貴族の世界』(清水書院、一九七二。一九八四新書版)による。

⑥ 宴會の歡樂の最中に悲哀を發する類型的形成とその展開については、川合康三「うたげのうた」(『中國文學報』五三冊、一九九六)を參照。

⑦ 『孟浩然詩集』(上海古籍出版社影印宋本、一九八二)

⑧ 朱東潤『梅堯臣集編年校注』(上海古籍出版社、一九八〇)

⑨ 『全宋詩』第三冊(北京大學出版社、一九九一)

⑩ 朝鮮活字本影印『王荊文公詩李壁注』(上海古籍出版社、一九九三)

⑪ 林逸『宋歐陽文忠公脩年譜』(臺灣商務印書館、一九八〇)

⑫ 山本和義「蘇軾の詩にあらわれた人生觀——四川大學に於ける學術報告：草稿」(『南山國文論集』第一一號、一九八七)など、一連の山本氏の論考を參照。

付記：本論の骨子は二〇〇一年三月、臺灣大學中文系主催の「日本漢學國際學術研討會」において發表し、その席上、清華大學的林慶彰、臺灣大學の柯慶明、張淑香、金澤大學の李慶の諸教授から貴重な意見を受けた。それに觸發されて加筆したことを記して、謝意を表する。